

「まよひなき道」

一下田歌子 英国女子教育視察の軌跡 II—

大 関 啓 子

1895年（明治28年）5月22日、下田歌子は英国オックスフォード大学サマヴィル・コレッジ（Somerville College）を訪れ、3日間に亘り教育視察を行っている。これは2010年8月新たに発見した下田直筆の英文書簡4通の解説と、2010年8月と2011年8月に、チェルトナム・レディーズ・コレッジ（Cheltenham Ladies' College）およびサマヴィル・コレッジの協力を得て行った現地調査によって、初めて明らかになったものである。

大関（1993）と大関（1994）では、それまで不明であった下田の英国における教育視察について、1991年8月最初に発見した1通の直筆英文書簡（1895年2月23日付）¹⁾を糸口に、下田の教育視察の足跡をケンブリッジ大学ニューナム・コレッジ（Newnham College）とチェルトナム・レディーズ・コレッジに辿った。ここでは、新たに下田直筆の4通の英文書簡と前述の調査によって、オックスフォード大学サマヴィル・コレッジでの下田歌子の教育視察を考察する。

I

1895年5月21日付、チェルトナム・レディーズ・コレッジのドロシア・ビール校長（Dorothea Beale）に宛てた英文書簡によると、下田はその翌日の22日（水）に、オックスフォードのサマヴィル・コレッジへ、ロンドンから列車で向かっている。そこで、25日（土）までアグネス・メイトランド（Agnes Maitland）学寮長のロッジに滞在する予定と書いている。さらに同日夜の書簡では、都合により27日（月）まで滞在を延長し、そこから別のコレッジへ移動する可能性も示している。しかしオックスフォードへ行ってからの24日（金）の書簡では、急遽滞在を切り上げてその晩にはロンドンに戻っていることが明らかになる。実際、下田はサマヴィル・コレッジには5月22日（水）から2泊し、24日（金）まで滞在して視察している。その後の予定の変更についても、6月の日本への帰国を控え、かなり多忙なスケジュールの合間に学校視察を行っていたことがわかる。そのため訪問予定が二転三転し、日々変更されることになったのである。

大関：「まよひなき道」

これは大関（1994）で明らかにした通り、下田が1893年（明治26年）9月から2年間ロンドンを拠点として欧州の女子教育視察を行っていた期間の、まさに最後の仕上げの時期と言える。しかしこの間について、これまでの下田についての伝記・研究書等では、ヴィクトリア女王との謁見に焦点が集まり、渡欧の本来の目的であった女子教育視察の活動について、子細な言及は行われていなかった。それは、下田のこの2年間の滞欧中に視察に訪れた学校や日程についての詳しい記録が遺されず、帰国後出版された『泰西婦女風俗』『泰西所見家庭教育』および『欧米二州女子教育実況概要』『英仏独墺白端米女子教育の概要』『英国ヴィクトリア女皇謁見の印象』などの草稿や書簡といった、下田自身が視察校や人名などの固有名詞をほとんど省いて書き記したものが、唯一の手掛かりであったことに起因する。そのため、この度発見した下田直筆の英文書簡は、その教育視察を知る上で重要な鍵となるものである。

これらの直筆英文書簡については、現在までの調査では合計5通を明らかにした。最初に発見した1895年2月23日付の手紙に始まり、同年5月21日付、21日夜付、24日付、そして28日付²⁾といずれもドロシア・ビール校長宛てであり、チェルトナム・レディーズ・コレッジに所蔵されている多くの書簡の中に含まれていた。その文面からするとそれらの書簡に先行して送られたはずのチェルトナム・レディーズ・コレッジからの招待状や、その訪問後に下田に送られたビール校長からの多くの示唆に富んだ書簡、学校経営に関する種々の参考書類などが存在したはずであるが、それらは残念ながら本学には遺されていない。

II

下田の視察したサマヴィル・コレッジは、オックスフォード大学の名門コレッジの1つであり現在では共学となっているが、もともとは1879年に“an undenominational hall of residence for women”という最初の女子専門の学寮として、サマヴィル・ホール（Somerville Hall）の名称で創設された。開設は、現在でも名門コレッジ同志としてライバルといえる元女子学寮レディー・マーガレット・ホール（Lady Margaret Hall）と同年であり、その名称は創設者ではなく、数学者で科学者であり、19世紀科学の女王と言われ1872年に亡くなった、メアリー・サマヴィル（Mary Somerville）にちなんで、つけられたものである。マーガレット・サッチャー（The Rt. Hon. Margaret Thatcher P. G.）などの2人の首相を含む政治家や、ノーベル賞受賞者そしてアイリス・マードック（Iris Murdoch）など多くの著名な出身者がいる。

学則は、先行するケンブリッジ大学のニューナム・コレッジやガートン・コレッジ（Girton College）の女子学寮を手本としてつくられた。開設当初は12名の女子学生が入寮を許可され、初期のコースはすべて、オックスフォード大学の教授や他のコレッジの講師たちが教えていた。それは1922年に初めて、6名の講師（tutors）が“Official Fellows”として選ばれるまで続くことになる。

下田が訪れた時は、2代目のメイトランド学寮長の下で、前年の1894年にサマヴィル・ホールからサマヴィル・コレッジへ名称変更したばかりの改革の真最中であり、講師についてはまだこの状態が続いていた。それは下田が帰国時に持ち帰り、日本語に訳させたオックスフォード資料³⁾にも記録されている。

下田が日本に持ち帰り、和訳させたオックスフォードに関するこの資料は全44ページあり、その後半の22ページは、サマヴィル・コレッジに関するものである。さらにそのうち前半の15ページは、サマヴィル・コレッジの1894年(12月)の年報(英文・全28ページ)を元に、下田が選択した部分のみを訳させて残したものであった。その英文の原本は日本の下田資料には残されていないため、サマヴィル・コレッジ所蔵の元の1894年の年報と、この和訳版を比較してみると、かなりの省略部分があることが判明した。そこから下田が当時必要と考え、重視した部分が明らかになってくる。

III

サマヴィル・コレッジについてのこの和訳版資料において、下田は、その年報にあるコレッジの組織については全く省略せず、理事長や評議員21名は、書記・会計を添えて、その氏名・肩書に至るまで詳しく記させている。前述のコレッジ創設時の事情で、評議員もその半数以上がオックスフォード大学とその他のコレッジの所属(fellows)であり、サマヴィル・コレッジからは、メイランド学寮長只一人がメンバーとなっている。女子コレッジではあるが、1894年当時に、評議員の21名中、10名が女性であることは注目される。

規則に関しては、第1条から第10条まで極めて詳細に訳されている。第1条17歳の入学年齢と学力の認定、第2条の保証人は、現在でも同様のものがあるが、第3条の伝染病の家からの通学は許さずというのは、当時余程伝染病が流行っていた証であろうか。現在であれば本人の健康状態に限られているところであろう。第4条退学手続き、第5条退学宣告などはすべて学寮長の権限に任されている。第6条授業料その他の納入金と金額が明記され、第7条10月から翌年6月に至る1年3学期制の規定。第8条の信仰については、毎日の祈祷、毎日曜日の礼拝などが義務づけられているが、宗派が異なった場合でも、同等に待遇することを明記している。第9条では他からの招待について、学生は前もって学寮長に諮るよう決められている。当時は学生数も少なかった上、女子学生にとって、日常生活できめの細かい生活指導が行われていたことを示している。第10条日没を門限としているが、秋から冬の日没が早い英国では、午後3時頃には暗くなるため、少々厳しい門限と言わざるを得ない。

こうした規定の中で、第9条の信仰について下田は、英国の特に教育におけるキリスト教の影響の大きさに次のように感嘆している。

蓋し、ヴェクトリヤ女皇が、能く敬神の真理を察て、其宗教の長所を取り、以て、自ら、君徳婦道を躬行し給ひしからに、英国女子が強固なる精神は、能くこの宗教的徳育より、打ち固められたるなり。其点に於ては、今は我等が国も、遺憾ながらも、一步を彼れに譲らざる可らず。と、某仏国婦人が言ひたる。さる事もやあるらん。余は、各種の家族、幾多の女塾に宿泊して、屢々其過ちに陥らんとする者の脳裏に、無形の神を呼び起して、人咎めざるに慄然として、我れから、心猿の狂ふを停め、其既に過ちたる事に就きての悔悟に、反然として、客かならざる言語を、見もし聞きもしつる度に、よし、其事の縦令、迷信なるにもせよ。徳育に斯かる攻具を具備したるは、最と羨しき事なりと、感じたる事屢々なりき⁴⁾。

英国女子コレッジの視察を行い、その学寮内に滞在して、教員・学生たちと生活を共にするうち、日本ではキリスト教を頑なまでに拒んでいた下田にも、教育上のその影響力についての考えに、変化が表れ始める。それは、下田が英国で生活するうちに、周囲の英国人の宗教心に裏付けられた温かい親交によって、極めて自然に受け入れられていったものである。そして前述のように下田は、キリスト教信仰の教育上の効果を羨んでさえている。しかしそれは、あくまでも理解にとどまり、積極的に取り入れようとするまでには、至っていない。

信仰に関してサマヴィル・コレッジは、“an undenominational hall”として、異なる宗派であっても同等に待遇し、毎日の祈祷、毎日曜日の礼拝を学則で義務づけていた。

IV

下田が訪問した時のサマヴィル・コレッジの学寮長は、2代目のアグネス・メイトランドであり、前年の1894年に、ホールからコレッジへの名称変更を行ったばかりであった。彼女は1889年に学寮長になって以来5年間、コレッジ昇格への夢(“collegiate ambitions”)を抱き続け、まさにそれを名称に関して実現したところを、下田が視察したのである。

名称がコレッジにはなったものの、この時サマヴィルは、オックスフォード大学で公認された“full college”ではなかった。他の4つの女子コレッジも同様で、あくまでも“women’s societies”であり、サマヴィル・コレッジを含む5つの女子コレッジが、オックスフォード大学で、“full college”として公認されるのは、1959年10月まで待たなければならない。

オックスフォード大学における女子高等教育実現の過程は、まさに「徐々に」(“degrees by degrees”⁵⁾)であり、女子コレッジの設立だけでなく、1878年のAEW(an Association for Promoting the Higher Education of Women)の設立のほか、それまで出席を許されなかった講義の解放に始まり、講義の出席のみの場合の授業料の免除、試験を受ける権利、卒業試験であるTripos受験の権利、女性教員の誕生、そして最後に学位認定と、1つ1つ「徐々に」その権利を女性たちは勝ち取っていったのである。そこに至るまでの改革の道は遠く、女子学生本人たちだけでなく多くの人々の努力を要するものであった。

Triposはオックスフォード大学に先んじてケンブリッジ大学で、1881年に許可されている。しかしその最終目標として、女性が正規の学生として大学の“full membership”を得て、学位を得るには、オックスフォード大学でそれからさらに39年(1920年)、ケンブリッジ大学でさらに67年(1948年)もの長い歳月を要するのである。それまでの長い道のりを彼女たちは「闘い」(battle)と呼んで、それを勝ち取るまでの過程を、現在でも誇りとしている。

下田の視察した1895年当時のサマヴィル・コレッジで、メイトランド学寮長は様々な「闘い」の中心にいた。彼女は現在に至る歴代の学寮長の中でも別格であり、彼女自身がサマヴィルそのものであると言われる程、そのコレッジ精神を受け継ぎ、その上その伝統に新しい息吹を吹き込んだ人物であった。リヴァプールで生まれ、そこで既に数年働いた経験を持ち、料理や家庭経済の授業をし、本も出していた。若い頃にリヴァプールでA. J. クロウ(Anne Jemima Clough)の講義⁶⁾に出席するなど、自ら心に決めたことを熱心に説くタイプの人であった。1889年に学寮長に指名され

た時は40歳であり、当時の副学長（Dr. Heberden）によれば、管理・運営能力のすばらしさ、判断的確さ、その絶大なエネルギーなど、発展途中のコレッジにとって、必要とされる能力をすべて備えていた。また別の関係者によれば、彼女の判断力・経済管理能力・運動能力は天才的とも言われていたのである。

メイトランド学寮長は、食事や学生の社会生活、奨学金、講義リスト、チューター（個人指導講師）の調整、建築計画、他の女子コレッジとの連携など、すべてのことを1つ1つ成し遂げていった。彼女には何か貴族的なものがある一方で、スタッフとも完全に協調し、学生の大きな信頼を得ていた。

下田は実名を挙げてはいないが、彼女についての印象は、大変に良かったようである。しかし、ドロシア・ピールと比べて、その「真の親切」の点で劣っていると感じたことは否めない。

これをケムブリッジ、オックスホールド、両大学女塾の校長と^{あい}対比して、^{かんが}考ふるに、後者は、学文あり、見識あり、且つ、最も^か交際に熟して、其^{その}儀式的敬神の^{ようたい}容態、更に、点打つべき所無きに似たれど、数日間、其家^{その}に^{とど}止まりて、親しく、其人^{その}の言行を見聞する時は、誠に覆^{べか}ふ可らざる、また実に争^{あた}ふと能はざる者あり。これが親切は、幾分か、お世辞的口調と挙動とを免^{しか}がれざりしなり。然るを、前者が親切は、真の親切にして、決して、交際的修飾の親切に^あらざりしを感じたりき⁷。

前者とは、チェルトナム・レディーズ・コレッジのドロシア・ピール校長であり、後者がオックスフォード大学のサマヴィル・コレッジとケンブリッジ大学のニューナム・コレッジ他の学寮長たちである。つまりメイトランド学寮長もその中に含まれるということになる。彼女の親切はピール校長に比べ「交際的修飾の親切」と捉えられたようである。この当時、チェルトナムにもサマヴィルにも、学内に校長用（あるいは学寮長用）のロッジがあり、24時間いつでも利用できるようになっていた。下田はサマヴィルのこの学寮長のロッジに、5月22日（水）から2泊しており、その後一度ロンドンに戻ってから、改めてチェルトナムに出かけている。ちょうどメイトランド学寮長とピール校長を比較しやすい状況にあったのである。

サマヴィルでは、メイトランドが学寮長を務めた時期に、初めて学寮が満室になり、学生数は35名から86名に増え、1891年には選抜試験も行うようになった。それに応じて教員も増員され、最初のリサーチフェローの制度も確立された。AEWの講師としての名目で、女性の採用も増やしている。こうした初期の講師たちは、ほとんどがサマヴィルの出身者であった。それは逆に外部での女性教員の就職がまだ難しかった当時の状況を示している。

また寄付行為により、現在の正門がつくられ、学生寮として3軒の家と食堂の増築も1891年に行われている。下田の訪れる前年の1894年には、西館建設の第2段階が始まり、図書委員会もつくられた。その結果、オックスフォードでは女子コレッジとして初めての図書館の建設も行われたのである。1930年代になっても他のコレッジでは、図書館が学生に解放されていない場合が多かったが、サマヴィルのこの図書館は、初めから学生の必要に応じてつくられたものである。

こうした状況の下、サマヴィルは1894年に、ホールからコレッジへの名称変更を行い、社会的なステイタスも上がっていった。メイトランドは、その名をつけた建物の建設などではなく、コレッ

ジ運営に必要な予算を増やそうと努力し、その成果をあげていた。彼女のようにこうした計画を実行できる人物は、評議員21名の中でも、他にはいないと言われた程であった。しかしメイトランドは、その書簡の中で、多くの女性たちが高度な研究をしているにもかかわらず、女性教育の費用も、施設も、設備も足りないと述べている。この時代に、女性に degree をという強い要望に対して、大学側との議論は基本的に変わらなかった。

1896年下田の視察の翌年に、サマヴィルは、ガートンに倣い、学生に評議員の選挙権を与えている。そのためこの学生たちの支持が、その後の新しい研究員制度（1902年）や設備の改革などの成果を生んでいった。サマヴィルでのそうした兆しは、下田の訪問時にも、既にあったものと思われる。このようにして、強力なリーダーとしてのメイトランド学寮長の下で、女性のための理性ある高等教育を勝ち取る様々な「闘い」が行われている真只中に、下田はサマヴィル・コレッジを視察したのである。

V

当時オックスフォードにあった5つの女子コレッジの中で、下田は視察の対象として、なぜサマヴィル・コレッジを選んだのか。その中の4つについて、1930年の Oxford Proverb に、それぞれの女子コレッジの特徴を表す次のような言葉がある。

Lady Margaret Hall for Ladies, St Hugh's for Girls, St Hilda's for Wenches, Somerville for Women.⁸⁾

サマヴィル・コレッジはこの当時既に、“Women” 大人の女性のコレッジとしての雰囲気が高く、その校風は評判になっていた。5つの女子コレッジはそれぞれの個性を保ちながら、そのすべてが現在では共学化され⁹⁾、オックスフォード大学の公認名門コレッジとなっている。下田はケンブリッジ大学視察についても、ガートン・コレッジではなく敢えてニューナム・コレッジを、その特徴の違いを考えて選んでいる¹⁰⁾。オックスフォード大学でも、“Ladies”の特色を持つレディー・マーガレット・ホールではなく、大人の一般女性としての特色を持つサマヴィルを選んでいる。もちろん紹介者の存在も影響はあるだろうが、前もってその視察予定校の特質をふまえた上で訪問していると考えられるのである。

サマヴィル・コレッジを下田が選んだ最も大きな理由の1つは、前述のようなサマヴィルの特徴の他に、ホールからコレッジへの名称変更という極めて大きな変革を行った時期である。サマヴィルの歴史上、“an eventful year” と呼ばれる 1894年、下田視察の前年にサマヴィル・コレッジと名称を変更するには、既に述べたようなそのステータスを上げる前提となる改革がなされていた。こうした評判を下田はおそらく耳にして、視察対象としたと考えられる。その変革の過程を自らの目で確かめておきたかったのである。

さらにもう1つの大きな理由、というよりその中でも最大の理由は、アグネス・メイトランドという強力な学寮長の存在を無視することはできない。ここで下田は、メイトランドの改革の真髄を

見極めようとしたのではないか。彼女は、管理・運営能力に優れ、判断の的確さ、その絶大なエネルギーなど、発展途中のコレッジにとって、必要とされるその能力のすべてを、サマヴィルの改革、ひいてはオックスフォード大学での女子高等教育の実現に注ぎ込んでいた。下田はコレッジの敷地・建物・設備の他に、組織・学則・(個人指導)カリキュラム・学生数・学生生活・授業料等、さらには寄宿舎規則に至るまで入念に調べている。これらの資料は、下田が日本に帰国する前から既に、一般女性のための学校開設を計画していた証でもある。そしてこの年の8月に下田は日本に帰国し、その後それらは、1898年(明治31年)の帝国婦人協会の組織と翌1899年(明治32年)の実践女学校創設に影響を与えている。

但しここで注目すべきは、下田がオックスフォード大学とケンブリッジ大学のコレッジ制を、十分に理解していなかったのではという疑問が残ることである。持ち帰った資料の和訳版には、『オックスフォード、サマービル高等学校年報』とあり、サマヴィルは『高等学校』と訳されていて、『チェルトナム女子高等学校一覧』にあるチェルトナムの名称のコレッジとオックスフォード大学におけるコレッジとを、混同している可能性が大きい。おそらくこれを訳した人物が、オックス・ブリッジにおけるコレッジ制を全く知らなかったために起きた誤りであろう。

現在オックスフォード大学には38の公認コレッジがあり、ケンブリッジ大学では35のコレッジが認められている。この学寮制は英国でもオックス・ブリッジに特有のもので、日本やアメリカのカレッジとは全く異なる。大学が学校で、各コレッジはファミリーであるという説明もあるが、大学(University)は国立であり、その学生も教員もすべて、いずれかの公認コレッジに所属していなければならない。コレッジは私立であり、創設も12世紀から20世紀まであり、学則もそれぞれ異なっている。オックス・ブリッジの卒業生というと、必ずどのコレッジの所属かと聞かれる程、コレッジ制は両大学の教育の中樞を成すものである。原則として講義・試験と学位・卒業資格は大学で、寝食を含む生活と、“tuition”(ケンブリッジ大では“supervision”)と呼ばれる個人指導はコレッジでと、分担がはっきりしている。下田視察の当時、女子学生たちは大学の正式なメンバーではなかったため、コレッジを中心に生活し、非公式に大学の講義への出席と大学図書館の利用が許されていただけであった。

初期の女子学生たちには、第一期生としての誇りがあり、今まで出会ったことのない立派な教師たちによる講義、家庭内でわずかの知的共感も得られなかった彼女たちの理想を実現に導いた人々によって示される共感、古く美しい街との接触などが、世間の人々の好奇の目や古く厳しい住居の不便さなどに勝るものであったという。彼女たちを励まし支えた人々は、精神力における両性の質や類似性に関して、固定観念を全くもたず、道理にかなった努力を助け、不合理な抑圧を取り除き、女性に機会を与え、その結果を待つことで、女性に可能なことを見定めた。その対象は、性別だけでなく、人種や国籍や身分や貧富の差によって差別されている人々のために、彼らは成功への努力を傾けたのである。女子学生たちにとってこうした理解ある人々の存在は計り知れない恩恵となり、これらの女子コレッジは、“full membership”への道を実現して行った。その状況を、下田は自ら体験し、目撃していたのである。

下田のサマヴィル・コレッジ視察のキーパーソンともいえるアグネス・メイトランド学寮長は、様々な改革を行った後、1897年9月病に倒れ退職し、一度学寮長に復帰するが、1906年その職を

後任に譲りコレッジから引退し、同年8月に癌のため逝去する。57歳の若さであった。1889年から17年間学寮長として情熱のすべてを女性のための理性ある高等教育実現に注いだ生涯であった。

一方、下田歌子は、1895年8月日本に帰国し、その3年後の1898年に帝国婦人協会を組織し、翌1899年実践女学校を開設している。そこにはサマヴィル・コレッジ視察の体験と記録が活かされ、さらにメイトランド学寮長をはじめとする英国女子高等教育実現に努力した人々の夢が、しっかりと受け継がれている。

注

- 1) 下田はこの書簡を、ドロシア・ビール宛てにロンドンの寓居から出している。1991年発見当時は、現存する唯一の直筆英文書簡であった。
- 2) 1)の書簡に続いて、同じくドロシア・ビール宛てにロンドンの寓居から出している直筆英文書簡4通。2010年8月チェルトナム・レディーズ・コレッジで現地調査の折に、その存在が明らかになった。
- 3) 「有限責任女子公立学校会社附属オクスフォード高等女学校規則—オクスフォード、サマビル高等学校年報」。
- 4) 下田歌子『泰西婦女風俗』（1899）。引用文中のルビは原文より特に必要なものに限った。
- 5) Rogersの著書のタイトルの通り。
- 6) Anne Jemima Cloughは、ケンブリッジ大学ニューナム・コレッジの創設者であり、運動の遅れていた英国北部で、1866年The North of England Council for the Higher Educationをつくり、女子に対する大学の講義の解放を導き、さらには地方の女子大学の設立をもうながすことになった。これは女子教育改革運動の第3段階ともいえるものであり、The North of England Councilが、地方での女性に対する講義を実現させることになる活動の母体となった。詳細は大関（1993）pp. 46-7 参照。
- 7) 下田歌子『泰西所見 家庭教育』（1901）。引用文中のルビは原文より特に必要なものに限った。
- 8) Adams. p. 1.
- 9) オックスフォード大学で最後の女子コレッジであったセント・ヒルダズ・コレッジ（St. Hilda's College）が2008年に共学化され、タイムズ紙（*The Times*）にも書評として大きく取り上げられた。
- 10) 大関（1993）。

参考書目

- Adams, Pauline. 1996. *Somerville for Women—An Oxford College 1878-1993*.
Archer, R. L. 1921. *Secondary Education in the 19th Century*.
Bailey, G. ed. 1923. *Lady Margaret Hall: A Short History*.
Balfour, Graham. 1903. *The Education Systems of Great Britain and Ireland*.

- Barnard, H. C. 1947. *A History of English Education from 1760*.
- Beale, Dorothea. 1888. *Girls Schools, Past and Present*.
- Bottrall, Margaret. 1985. *Hughes Hall 1885-1985*.
- Clark, A. K. 1953. *A History of the Cheltenham Ladies' College 1853-1979*.
- Cole, G. D. H. & Raymond Postgate. 1938. *The Common People 1746-1938*.
- Curtis, S. J. 1947. *History of Education in Great Britain*.
- Fawcett, Henry. 1894. *The Story of the Opening of University Education to Women*.
- Gairdner, James ed. 1987. *The Paston Letters*.
- Gardner, Alice. 1921. *A Short History of Newnham College, Cambridge*.
- Gardner, D. 1929. *English Girlhood at School*.
- Goding, John. 1883. *History of Cheltenham*.
- Gorham, D. 1982. *The Victorian Girl and the Feminine Ideal*.
- Hale, H. 1929. *University College London 1826-1926*.
- 平塚益徳. 1965. 『女子教育史』
- Hunt, Felicity & Carol Barker. 1998. *Women at Cambridge—A Brief History*.
- 実践女子学園八十年史編纂委員会編. 1981. 『実践女子学園八十年史』
- Kamm, J. 1965. *Hope Deferred*.
- Kaye, Elaine. 1972. *A History of Queen's College*.
- 故下田校長先生伝記編纂所 編. 1943. 『下田歌子先生伝』
- Mann, Jill. 1991. *Apologies to Women*.
- McWilliams-Tuberg, Rita. 1975. *Women at Cambridge*.
- Neef, Wanda Fraiken. 1929. *Victorian Working Women — an Historical and Literary Study of Women in British Industries and Professions 1832-1850*.
- 西尾豊作. 1936. 『下田歌子伝』
- 大関啓子. 1993. ‘The “Hill Difficulty”—Women’s Higher Education in England’
『実践女子大学文学部紀要』第35集 pp. 37-57.
- 一. 1994. 『『まよひなき道』—下田歌子英国女子教育視察の軌跡』『実践女子大学文学部紀要』
第36集 pp. 1-21.
- 一. 2005. 「“The Social Status of Japanese Women”—下田歌子 *The Times* への寄稿」
『実践女子大学文学部紀要』第47集 pp. 77-84.
- Patterson, Elizabeth C. 1979. *Mary Somerville 1780-1872*.
- Phillips, Ann. ed. 1979. *A Newnham Anthology*.
- Rayner, M. E. 1993. *The Centenary History of St Hilda's College, Oxford*.
- Rogers, A. 1938. *Degrees by Degrees: The Story of the Admission of Oxford Women Students to Membership of the University*.
- 下田歌子. 1895. 『外の濱づと』, 『香雪叢書』第1巻 (1932).
- 一. 1896. 『欧米二州女子教育実況概要』自筆草稿.

- 一. 1896. 『英仏独伊墮白端米女子教育の大要』 自筆草稿.
- 一. 1898. 『帝国婦人協会設立趣旨』 自筆草稿.
- 一. 1899. 『泰西婦女風俗』
- 一. 1901. 『泰西所見 家庭教育』
- 一. 1933. 『英国ヴィクトリア女皇謁見の印象』 自筆草稿.
- 一. 『英国学風』

Simon, Brian. 1960. *Studies in the History of Education 1780-1870*.

Steadman, Cecily. *In the Days of Miss Beale*.

St. Hilda's College. 1991. *St. Hilda's College, Memorabilia*.

梅根悟 監修. 1977. 『女子教育史』世界教育史大系 34.

これまでオックスフォード大学サマヴィル・コレッジには、下田についての記録は残されていなかった。この度の調査結果により、実践女学校を開設する前の1895年に、下田歌子がサマヴィル・コレッジを訪問視察したことが、年報（Somerville College Annual Report 2010/2011, p. 38）に正式に記録されたことを、付記しておく。

本稿についての英国での平成22年8月の現地調査については、平成22年度実践女子学園教育研究振興基金助成金により、また平成23年8月の英国現地調査については平成23年度実践女子学園プロジェクト研究下田歌子研究所の助成によるものである。

Miss Agnes Maitland

